

「頭の柔軟体操」～“ユーモア・ウィットの威力”をどうぞ！

人間考学を究めんとされる永遠の学徒、渡辺明・九州工業大学名誉教授にご登場いただいて、表題のシリーズをお届けします。

柔らかくほぐされた頭脳から、素敵な夢アイデアが誕生しますように！（コラム担当 T 生）

第 18 回

原点回帰 (No.9)

平成 26 (2014) 年 12 月



京大で長年「中国文学」を講じてこられた吉川幸次郎教授は、ご退官に際し「私は学生達に問題点は指摘したが、解答は決して示さなかった。学生自身に考えさせ解答させることこそ教育の本義だと思う」と結ばれた。

また、筆者が九大院で「応用数学」を受講した際、担当教授の皮切りの挨拶は次の通りであった。

「教壇に積んだこれらの本は、私の講義を受講する上で諸君が購入すべき参考書である。ただし、日本の専門書は一直線に正解を示しており、いとも簡単に解答が得られたが如き印象を与えており問題だ。思考の推移、解決の糸口、試行錯誤、失敗の数々など、艱難辛苦の過程が開示された本こそむしろ貴重なのだ」

両先生は、この様に、単に「オボエル」のではなく「ワカル」勉強の大切さを強く説いておられたのであった。

さて、筆者はその昔、某大手ガラスメーカーの本社会議室に招かれたことがあった。ブラクトーンのデスクの上には一台の電話も一冊の本も置いてなく、辛うじて人の顔が識別できる程度のほの暗い灯りが点されていた。「ここで色々なアイデアを模索し、構想を練り、新しい企画を立てるのです」と説明された。

そこには人間にじっくりと「ものを考えさせる雰囲気」が見事に仕込まれていた。「思索の集中のためには、明るい満艦飾の舞台など不要であり、むしろ障害になる」と筆者は痛感した。

近年の、子供の勉強部屋を覗いてみよう。図書満載で文明の利器総動員の装備に囲まれ、携帯電話までも許された満艦飾の大自由空間なのである。曾て、憂国の志士達が天下を論じた松下村塾・咸宣園 etc.に比べ当に「月とすっぽん」である。そして、長年天下無敵とさえ言われてきた日本の子供達が、世界の学力コンテストで次々に敗退していった原因を考えてみなければならない。

人工衛星から眺めた場合、ドバイ、東京、ニューヨークの夜景が際立って明るいとのこと、分不相応に資源を消費している日本には猛省材料だが、「日本にはむしろ暗闇こそ必要だ」と、山隅利通氏が何か書いておられた。

某外国人ジャーナリストが「日本人は自らは考えないで新聞・TVの主張を鵜呑みにして、そのまま鸚鵡返ししているのではないかとさえ言っていたが、われわれはそれぞれに暫し満艦飾の明かりを消し、TVの電源を切り、新聞の活字からも目を離して、各自、己自身の頭で沈思黙考・深慮遠謀すべきではないか。そして特に近年、大国が武力によるほか、情報の誇大・歪曲・捏造などで、なり振り構わぬ情報戦も展開している中、日本は今こそ原点に立ち返って、「他力本願型でなく、自主自衛で生き残る道」を真剣に探るべきではないのか。

人工衛星 ドバイ東京をまず見付け	未明
エコはどこ 日本の夜景 明るすぎ	大中ともこ
目の見える人は不自由なもんだ。大事なものは何も見えないんだね。	座頭市
目を閉じよ、そしたら本質が見えるようになる。	三島由紀夫

昭和 18 年 4 月 18 日、連合艦隊司令長官山本五十六大将がソロモン諸島ブーゲンヴィル島上空で搭乗機を撃墜されて戦死し、日本は致命的な打撃を受けたのだが、彼の行動の逐一が実はアメリカの情報網に捕まっていたことが戦後悉に報じられ、アメリカの当時の情報戦力の凄さに驚嘆させられた。

更に、※注 1 ステネット著の「真珠湾の真実」（平成 13 年）に、日本軍のハワイ奇襲をルーズベルト大統領とワシントンの政府首脳部は実は事前に知っていながら、ハワイのキンメル米太平洋艦隊司令長官には敢えて知らせずに、日本の奇襲を容認し、「宣戦布告なしに行われた卑劣な騙し討ち」にみせることで、それまで採ってきたヨーロッパ大陸への不干渉政策の転換と、第一次世界大戦後のヨーロッパの惨状を知る米国民の厭戦感情の払拭を図ったとする「ルーズベルトの陰謀」が、これまで未発掘の極秘史料から暴かれたと書かれて

いたのと、それに関連して中西輝政氏が「日本はあの戦争でマッカーサーやニミッツに敗れたのではない。日本を撃破した真の主演はローレンス・サフォードやジョセフ・ロシュフォートら、日本の外交・海軍の暗号を悉く解読した人たちであった。そして今日でもアメリカを支えている大黒柱は『エシロン』なのだ」と、述べられたことは衝撃的で、忘れ難い。



さて、昭和 43 年 6 月、九大で工事中の電算センターに米軍ファントム機が墜落したことに端を発して学生運動が燃え盛り、同じビルに立て籠った過激派たちが屋上の機体の残骸を格好のシンボルにして、激しい反戦反基地闘争を展開していったため、時の九大学長には苦渋の日々が続き、やがて身の危険すら危惧される事態に及んだ。

その学長に 10 年来師事していた筆者に「ワタナベ君、明日は行方不明だよ」と言って休まれる日が月に 1 ～ 2 度あった。もう時効だから許して頂いて告白すると、それは、「明日はゴルフに行くよ」の意味で、先生と二人の間だけに通じる隠語であった。新聞記者は勿論、側近の大学職員にもその行先は決して言わなかった。

内憂外患乱麻の渦中で苦闘されている先生に、せめて月に 1 ～ 2 度くらい解放して差上げねばの一念であった。

そして、今にして思えば、あれが一番の、恩師への貢献だったのでは、とひそかに自負している。

さて、情報技術は更に高度化して、周辺のあらゆるボールが剥ぎ取られ、今や個人の秘密情報までも殆ど搦め捕られているといわれている。そしてそれどころか、覇権のために更に先鋭化し、情報の偽装・捏造などの操作で歴史までも改竄しようとする国さえ見られる有様、この中を生き抜くためには余程の覚悟と周到な対策が必要であろう。

知に働けば角が立つ・・・夏目漱石を持ち出すまでもなく、とかくこの世はすみにくい。いや、それが亢進して夜も眠られないほど。私たち庶民ができるささやかな抵抗とは一体何であろう。

孟子の根本思想は、

「民を貴しと為し、社稷之に次ぎ、君を軽きと為す。是の故に、丘民（きゅうみん） = （衆民）に得られて天子となり・・・」つまり、一番尊いのは民である。民のためにこそすべてがあるように、為政者には願わずにはおられない。

注1. ステネット著の「真珠湾の真実」（平成一三年）には、日本軍のハワイ奇襲をルーズベルト大統領とワシントンの政府首脳部は事前に知っていながら、ハワイのキンメル米太平洋艦船司令長官にはあえて知らせずに、日本の奇襲を容認し、「宣戦布告なしに行われた卑劣なだまし討ち」にみせることで、それまで採ってきたヨーロッパ大陸への不干渉政策の転換と、第一次世界大戦後のヨーロッパの惨状を知る米国民の厭戦感情の払しょくを図ったとする「ルーズベルトの陰謀」が描かれています。この情報戦略が、アメリカ人の戦う意欲、意志力を創出したということも、逆の意味で記憶しておきたいものです。

渡辺 明 九州工業大学名誉教授
夢アイデア審査委員会 初代（平成14年～17年）委員長